言語の基層から真の「笑い」を汲み上げる人

堀内利美詩集『笑いの震動』に寄せて

1

生まれてきた赤子が泣き疲れて眠りながらこの世で初めて微笑むように、絶望や心労を解きほぐす、生きる喜びである「笑い」が私たちには必要なのではないか。いや「笑い」があるからこそ世知辛いこの世を生き伸びる知恵が私たちには可能になるのではないか。詩の中に笑いを導入することは易しそうだが実際は難しい試みだ。現代詩の試みで、世界の苦悩を解きほぐし内側から笑わせて、世界の硬直化した歪みをいったん白紙に戻して、再び本来的な世界に組み替えて行こうとする「笑い」の詩は数少ないだろう。堀内利美さんの詩の試みは、その笑いを正面から主題にした根源的な連作詩篇だ。このような詩篇を堀内さんはなぜ書くことができたのか。

長年英語教師をされ、米国セント・ジョンズ大学などでも英米詩の創作を学んだ堀内さんは、著書二十数冊の多くを英語で書き、日本語の詩集やエッセイ集は数少ない。その日本語詩集にも英語の詩行が挿入されている。そんなバイリンガルの詩人である堀内さんが、今までの詩作の粋を凝縮したような本格的な日本語詩集『笑いの震動』を刊行した。バイリンガルの詩人の考えを示唆している詩「二つの言語」が堀内さんの日本語詩集『ちょうちょのフィロソフィ』の中にあるので引用してみる。

二つの言語

二つの頭は
一つの頭より
思考を豊かにする

二つの言語の思考は
一つの言語の思考より
英知を豊かにする

四つの眼は
二つの眼より
沢山のものを見る

The sun has gone down;
the lake embracing the moon
refines the stillness.

四つの手は
二つの手より
沢山の事を成し遂げる

二つの言語は
一つの言語より
多くのものを見つめる・
多くの事を成し遂げる・
新鮮な知識と創作活動が
たのしめるようにする

日本語も　外国語も　愛する
ひとたちのマインドとハートに
コトダマは　bliss の光を与える

Intelligence/ works better
when emotions
are present.
The counsel
of two languages
speaks / more wisdom
than one.

堀内さんは二つの言語で同時に考えていることが分かる。それは、二つの眼で物を見ることよりも四つの眼で物を見ることのほうが、より多面的に物を深く感じることができるという確信があるからだろう。また一つの言語の思考だけでなくもう一つの言語の思考を重ね合わせることによって、二つの言語の両面から詩の本質に近づこうとする試みなのだろう。初めに挿入された英語俳句のような三行詩を訳してみると「落日の果て／湖は月を懐に抱き／無音の世界」のような意味になるのかもしれない。バイリンガルの詩論的な詩に入れられた英語の詩行は、実は美的で風雅な精神によって生み出されている。「日本語も　外国語も　愛する／ひとたちのマインドとハートに／コトダマは bliss の光を与える」という詩行には、言語の違いを超えた「コトダマ」を基底に据えている言語観を堀内さんは語っている。「コトダマ」は言語に霊力が結びついていて、言語で言われたことが実現されるという言霊のことだろうが、堀内さんの「コトダマ」は、日本語・英語の差異を超えて、きっと「bliss」（至福）の光を呼び寄せることができると語っている。堀内さんの溢れるような詩行はその表層言語を超えた「コトダマ」に促されているのだ。日本語に無いものを英語に、英語に無いものを日本語に見出そうとしているのではないか。「コトダマ」はその意味で日本語と英語の基底を探りながら、二つの言語を競い合わせて新しい言語世界を生み出そうとする試みとも感じ取れる。

2

堀内さんを私に紹介してくれたのは『原爆詩一八一人集』英語版の翻訳者の中心だった郡山直さんからだった。郡山さんに英語版の書評をしてくれる日本のバイリンガル詩人を推薦して欲しいと依頼すると、真っ先に堀内さんを紹介してくれたのだった。しかし書評の代わりに詩「『原爆詩一八一人集』英語版」が送られてきたのだった。内容をよく読みとってくれて、感想だけでなく、この書物が世界の心ある人たちの心と響き合うだろうと、力強く語ってくれたのだった。

『原爆詩一八一人集』英語版

（略）
日本の一八一人の詩人が
人間への愛を　縦糸にして
広島・長崎の声を　横糸にして
その糸に　こころの色彩をしみこませて
織り上げた『原爆詩一八一人集』

このアンソロジーを　世界的な
日本の四人のバイリンガル詩人が
英訳した『Against Nuclear Weapons』

このふたつのアンソロジーには
異なる言語の「音声とリズムと形」で
詩化された「火炎と氷炎の風景」が
メドレーのように　描かれている

このアンソロジーを手に取ると
そこに詰め込まれている言葉から放散される
独特なオーラ（aura）を　感じる

ページをめくると　言葉に内在している
熱い氷の炎が　目に焼きつく
冷たい火の炎が　心に凍てつく

人間を焼き殺す人間に　ホロコーストのシーンに
肉体がおののく　心の関節が軋めく

でも　ぼろぼろの白い涙と青い涙は混じり合って
こころの奥にある〝美しい声〟をつたえている――

Let the sun bloom
in the gloomy heart.
Let the flowers sleep
in the moon's embrace.
（略）

言語には　幾世紀にもわたって
事実や真実を保存する力がある
事実や真実をつたえる力がある
だから　広島・長崎の声を
死者の魂の声を　怒りと悲しみの声を
国際語とヴァースフォームと
マインドのペンとハートのインクで　詩化して
世界の心に届けることには
ふかい深い意味がある
だいじな大事なことがある

それゆえに
『Against Nuclear Weapons』は
世界の必読書・必修科目である
この書によって　世界の心は
いっそう磨かれて　やわらかになってゆく
いっそう成熟して　〝愛〟になってゆく
愛は　こころを若くする　元気にする
愛は〝a fountain of ageless youth〟である
愛には〝祈りの声〟が宿っている――

私は二〇〇七年に『原爆詩一八一人集』を他の編者と編集する際に、英語版を出来るだけ早く数ヵ月後に刊行することを提案し、英語版を作ることを前提に公募を開始した。その試みは堀内さんのようなバイリガルの詩人である郡山直さん、水崎野里子さん、結城文さん、大山真善美さんの四人とネイティブ達の協力によって実現された。今から考えると、私たち編者たちの意識はバイリンガルの詩人たちとかなり近いところにいたと思われる。原爆詩というテーマは日本語だけのものではなく、世界に発信しなければ核兵器廃絶にまで到達することはできない。英語に翻訳することはもちろんだが、むしろ本来的には突き詰めていくと英語で日本の詩人たちは詩を発信しなくてはならないのではないか。という思いを英語版の序文を書いていて痛感したのだった。なぜなら『Against Nuclear Weapons』（『原爆詩一八一人集』）では、この詩集を読んで共感を覚えたら原爆詩を書いて送って欲しいと呼びかけたからだ。将来に増補版を刊行する時の候補作としたいと書き記しもした。人類にとって重要な社会的なテーマや、普遍的な人間的なテーマは固有の言語を超えて他の言語でも表現されなければならないと痛感したのだった。私はその意味でバイリンガルの詩人たちは日本の詩人の未来の試みを、いま悪戦苦闘しながら切り拓いているのではないかと考えている。「『Against Nuclear Weapons』は／世界の必読書・必修科目である」と堀内さんは高い評価をしてくれた。そして「原爆詩集」には世界を和解させる愛が存在し、その愛は〝a fountain of ageless youth〟（スペインの探検家が探し求めた

青春を取り戻す泉）であるのだという。だからこそ「原爆詩集」から〝祈りの声〟を感じたと堀内さんは誰よりも率直に語ってくれたのだった。私は堀内さんのようなバイリンガルの詩人たちに強い共感を抱いたのだった。

3

新詩集『笑いの震動』には一章「笑いの震動」二十六篇と二章「光の鈴」二十八篇の計五十四篇が収録されている。一章の三番目にタイトルになった詩「ほほえみ」がある。堀内さんが「笑い」をどのように考えているかを分かりやすく書いている。

子供の寝顔に
子供のニコニコに
母親はほほえみかける
その〝ほほえみ〟は
子供を育てる力になる

現代のモナ‐リザの
顔に浮かぶ
レオナルド‐ダ‐ビンチのスマイルは
人々のこころをひきつけている

ほほえみは
自然界にもみとめられる

大地は
陽光をあびて
ほほえんでいる

春の日に
花がほほえんでいる

小川は
ほほえみながら
きらきら流れている

堀内さんの「笑い」は、子供の寝顔を見た母親がほほえむことや、また大地に降り注ぐ陽光のもとでの花々や小川の輝きをほほえみと感ずることなのだ。それゆえに現代のシニカルな嘲笑や冷笑などの他者を笑い飛ばすことではなく、他者や事物の命の輝きを感受して自然に内面から「ほほえむ」ことなのだろう。「笑い」とは体内の血の循環のようなものだと積極的に「笑い」の効用を位置づけている。そしてほほえみとしての「笑い」を詩の中でも作り出していくのだ。

スマイルは
「声のない言葉」で語る

その言葉は
子供にも
大人にも
容易に分かる
国際語である

その言葉は
子供にも
大人にも
愛されている
国際語である

一瞬の間の
ほほえみにも
人の顔と心に
優美さと香りを添えるものがある

ほほえみは
毎日あたらしくなる

ほほえみ自身は
色あせることも
枯れることもない

ほほえみは
人間の美の源である

〝ほほえみ〟は
ほほえむひとに
いっそう美しく
ほほえみかける

「ほほえむ」とは英語でスマイルだが、堀内さんはスマイルが「声のない言葉」であるという。それだけ他者に優しくほほえみかけるとは、その人を祝福するような言葉を発しているのだと考えているのだろう。その原点は赤子のほほえみに対して大人が自然にほほえみの反応をすることをイメージしているのだろう。「ほほえみは／人間の美の源である」と言い切る堀内さんは、日本人というよりも、真善美のイデアを追求した古代ギリシャの哲学者のような純粋さを感じる。「笑い」の深みに愛を置いて、人と人とが出会う瞬間に必要不可欠な潤滑油用として考えるだけでなく、コミュニケーションの根幹に据えて考えている。タイトルの詩「笑いの震動」に

ついて触れてみたい。

笑いの震動

ラテン語の〝humor〟は
液体を意味していた
〝humors〟は
人の四体液＝
血液・粘液・黒胆汁・黄胆汁を
意味していた

この四体液の配分の具合で
人の体質や気質が定まると
生理学者たちは考えていた

言いかえると
学者たちは
四体液のうちのひとつが
優勢になると
身も　心も
不安定になると考えていた

それゆえに
学者たちは

上機嫌（good humor）を作るためには
四体液のバランスが
必要であると考えていた
四体液のアンバランスは
不機嫌（ill humor）
であると考えていた

このように
人の四体液は
人の身体と精神の状態に
深く関係している
と考えられていた

ユーモアとは十七世紀ごろのイギリスの詩人・劇作家のベン・ジョンソンが医学用語のフーモア（気質、体液）を文学用語に応用したとも言われている。身体の内側から笑いがこみ上げてくるのだから体液とも関係があるし、ユーモアが分かるのは気質も大きく影響していることは理解できる。堀内さんは川柳やパロディなどにも触れながら、ユーモアの由来について語り、ユーモアの精神の重要性を溢れるように語っていく。

ユーモアと
ウィットは

人の心をやわらかにする・
まどろんでいる心を呼び起こす・
思想に力をくわえる・
知力の機敏さをやしなう

ウィットに富むユーモアの閃光は
陰うつな〝黒い雲〟を消し散らし
快活な雰囲気をつくり出している
そこには
硬い思考では得られない
〝大切なもの〟がある
（略）
ところで
ウィットのある
「ユーモラスな世界」では
ある人に対しては
硬い無表情の顔にするものが
他の人に対しては
肋骨と脇腹をくすぐる
という現象が生ずる
であるから
ユーモアや
ウィットが作り出す
「笑いの震動（mirthquake）」を

よく味わうためには
思考することも必要になる

堀内さんはユーモアの効用を、硬くなりがちな人の心を柔らかくし、思想や知力が限界に達した時の起爆剤的なものとして位置づける。「硬い思考では得られない／〝大切なもの〟がある」という詩行には、ユーモアに対して最大限の賛辞を示している。しかしユーモアやウィットが通じない場合があることも明らかにしている。その現象はきっとユーモアやウィットが唯の気の利いた言葉だけになり、話す側の人間の人生経験から生まれたユーモアやウィットであるかが問われていることを暗示しているのだろう。〈「笑いの震動（mirthquake）」を／よく味わうためには／思考することも必要になる〉とは重要な指摘をしている。その場面においてユーモアやウィットがそれを発する人の内側から「笑いの震動（mirthquake）」になって伝わらなくてはならないことを言っている。「mirthquake」とは「mirth」（陽気）と「quake」（震動）と結びつけた堀内さんの造語だと聞いている。人生経験を経た肉体を通して湧き上がるユーモアこそが、真の「笑い」をほほえみとして他者へ届けられるのだという、堀内さんの願いが込められているのだろう。この詩篇の最後は次のように締めくくられている。

古代の

ラテン語の泉から
湧き出ている
ユーモアの水は

〝機知〟や
〝陽気〟で
たえず
浄化され

ユーモラスな言葉
ユーモラスな音声
ユーモラスな音楽
ユーモラスな絵画で

21世紀の
人の体と心に
活力をあたえ
人生の大地を
いろどり
うるおしている

体と心にしみこむ
ユーモアの水には
人間を健康にする
霊力が宿っている

堀内さんのこの「笑いの震動」を読んでいると、日本人が世界の人々とコミュニケーションをするためには、何が必要であるかが自然と教えられる気がしてくる。堀内さんがなぜ「コトダマ」と言ったか、この「ユーモアの水には／人間を健康にする／霊力が宿っている」という最後の三行を読むとよく分かる。肉体を通したユーモアの精神を宿した「コトダマ」こそが日本語・英語などの言語の基底には必要なのではないかと静かに語り続けている。その意味では詩であり詩論であり普遍的な文化コミュニケーション論を含んでいると考えられる。このような一貫したモチーフを抱えた、ユーモアが溢れてくる詩集は今までなかったのではないか。

第二章の「光の鈴」は、自伝的な部分もあり、大自然に触れながら詩作を続けている堀内さんの最新の連作詩篇だ。農作物や昆虫など森羅万象とユーモア溢れる対話をしながら、自然の響きを「光の鈴」と感受したものだ。その若々しいリズム感を多くのユーモアを愛する方たち、真の「笑い」に触れたい人たちに読んでもらいたいと願っている。